

イネ縞葉枯ウイルス（RSV）の保毒状況と本田のヒメトビウンカの発生状況

1. 目的

イネ縞葉枯病の発生は平成26年度以降再び徐々に増加傾向にある（図1）が、本ウイルスを伝搬するヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルスの保毒状況調査は、ここ数年実施されていない。このため簡易ELISA法によりRSV保毒状況を把握するとともに、本田におけるヒメトビウンカの発生状況を調査し、今後のヒメトビウンカの防除対策の資料とする。

2. 試験の概要及び調査方法

1) ヒメトビウンカ（成幼虫）の採取

- (1) 採取場所：県内の7町村
- (2) 採取時期：2019年6～8月
- (3) 採取方法：予察灯および本田掬い取り

2) 検定方法

(1) 検定試薬

日本植物防疫協会より市販されているイネ縞葉枯ウイルス検定試薬（ポリクローナル抗体利用DAS-ELISA用セット）を使用した。

(2) 虫体処理

腹部をピンセットで胸部を圧縮し、これを検体とした。

(3) 検定手法

簡易ELISAによるイネ縞葉枯ウイルス（RSV）保毒検定マニュアルにより実施した。

3) 本田におけるヒメトビウンカの発生調査

- (1) 7月～9月にウンカ・ヨコバイ類の広域調査を行い、圃場ごとのヒメトビウンカの発生密度（1圃場当たり概ね2カ所、10株払落し虫数）を調査した。

3. 結果の概要

- 1) 採取したヒメトビウンカ113検体のうち、陽性は1検体で陽性率は0.9%と低かった（表1）。
- 2) 広域調査では、全期間調査で7割のは場でヒメトビウンカ（成幼虫）の発生が認められた。時期別では東予地域では8月調査、中予では7月調査、南予では7月調査で最も広く確認された（表2）。
- 3) は場の成幼虫数の密度調査では、10株当たり10頭以上のは場の割合は、全期間を通して中予地域で10.0%、南予地域で8.1%に対して、東予地域で18.4%と高い傾向を示した（表2）。
- 4) 以上の結果、ヒメトビウンカの発生量は徐々に増加しているが、イネ縞葉枯ウイルスの保毒検定では保毒率は高くないが、今後も引き続き保毒検定を実施することが重要と考えられた。

なお、ヒメトビウンカの発生量については、箱施用剤の有無や種類が大きく影響していると考えられ併せて詳細な検討も必要である。

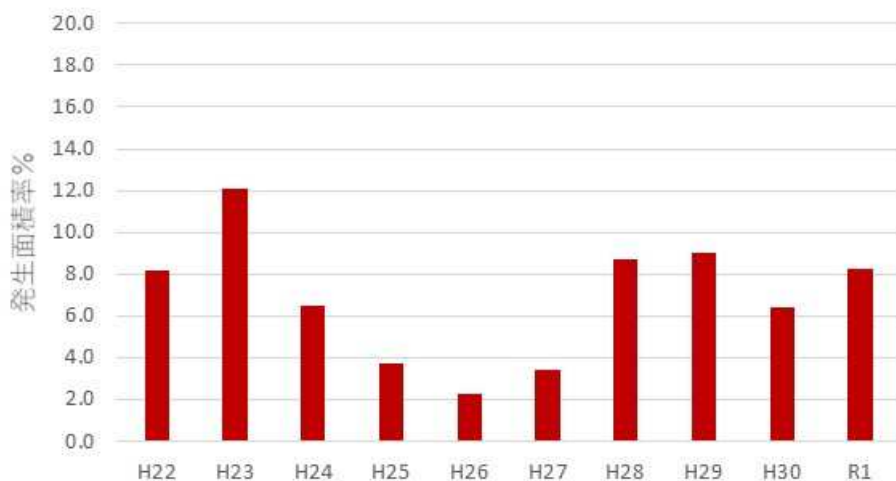


図1 イネ縞葉枯病の発生面積率の推移 (普通期栽培)

表1 ヒメトビウンカの縞葉枯ウイルス検定結果(2019)

地域	検体数	陽性数	陽性率%
東予	60	1	1.7
中予	53	0	0.0
計	113	1	0.9

表2 広域調査におけるヒメトビウンカの発生密度調査結果(2019)

地域	調査月	発生圃場率	密度別発生圃場率(成幼虫数/10株)				
			0頭	1~4頭	5~9頭	10~49頭	50頭~
東予	7月	52.0	42.9	32.1	14.3	7.1	3.6
	8月	82.1	17.9	33.3	22.8	26.0	0.0
	9月	70.8	29.2	21.4	19.6	8.6	0.3
中予	7月	83.2	16.8	50.4	25.2	7.6	0.0
	8月	67.6	32.4	41.0	13.3	11.4	1.0
	9月	53.5	46.5	44.2	9.3	0.0	0.0
南予	7月	83.2	42.9	32.1	14.3	7.1	3.6
	8月	67.6	44.4	33.3	16.7	5.6	0.0